電子戦評価施設

防衛装備庁長官官房
装備開発官（航空装備担当）

経緯

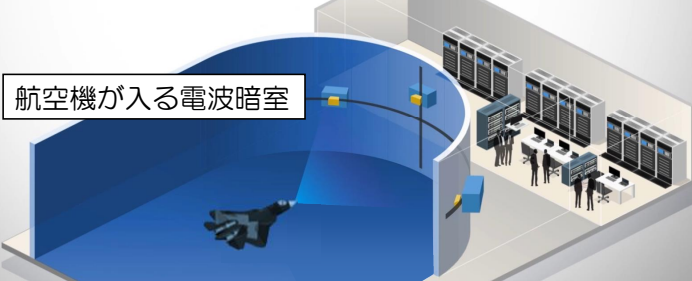
電子戦評価の中心となる施設

　電磁波は、テレビや携帯電話、ＧＮＳＳ(Global Navigation Satellite System)など様々な用途で利用されており、防衛分野でも通信器材、レーダなど、広く使用されています。これら電磁波を用いた装備品を実環境で評価した場合、他の装置へ干渉する可能性や周辺国から収集される危険性があり、特に電磁波を妨害する電子戦の評価では送信した電磁波を外に出さない電波暗室による評価が必要となります。このため、航空機等に搭載した通信器材やレーダが妨害された際に、それらの器材が有効に機能するかを評価する評価システム及び電波暗室を備えた施設を整備しています。同施設は令和6年6月末に完成し、現在、評価システムを構築中です。

特徴

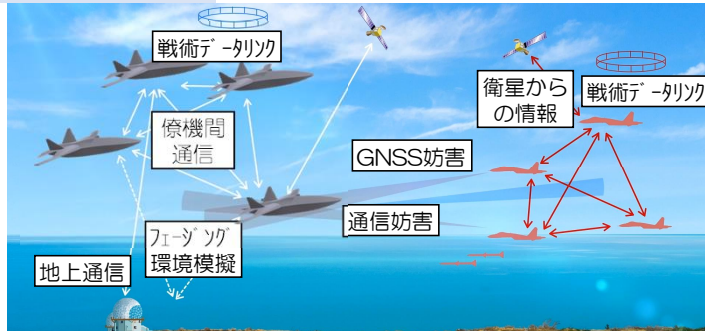
次世代装置の評価に必要な施設

1　航空機に通信器材等を搭載したままでの計測が可能
2　航空自衛隊の輸送機から戦闘機までの航空機が搬入可能な大きさ
3　滑走路と接続される進入路を設置
4　戦闘機を吊り上げた測定が可能であり、最適な位置での測定を可能とするため、複数のクレーンを設置
5　レーダから通信までの広い周波数に対応
6　レーダエコー及び相手のレーダ妨害を模擬した評価に対応
7　通信器材の高周波化、広帯域化に対応し、耐妨害性能等の評価に対応
8　ＧＮＳＳ受信器材の耐妨害性能の評価に対応

電子戦評価技術

レーダ評価　広帯域信号評価を実現

通信電子戦評価　通信ネットワークの模擬に対応

アンテナパターン測定　高精度測定に対応

評価システムは
新世代装備研究所にて
試験中。細部は、ビデオ

施設の位置及び大きさ

電子戦評価施設

国内最大の電子戦評価施設

建設風景

R4.5.26

R4.8.25

R5.2.16

R6.6.30